Fauve-Chamoux, Antionette and Emiko Ochiai (eds.)

The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries,

(Population, Family, and Society Vol. 10) Peter Lang, Bern, 2009, viii+558pp.

本書は直系家族に関する歴史人口学の論文集である．本書における直系家族の最小限の定義は世帯形態に関するもので，既婚子がひとりだけ親と同居するというものである．しかし家族研究の常として，人口学者であっても世帯の活動や規範といった側面に言及せざるを得ない．こうして直系家族の研究は，規範的価値を含む家族制度の研究に広がって行く．さらに歴史的資料が乏しい地域については，現代の家族パターンしか分析できない場合もある．

Fauve-Chamoux と落合恵美子の序章によると，ヨーロッパの直系家族では不均等相続による父系ラインの継承，世代間の経済的協同といった面が強調された．日本のイエの特徴としてあげられるのは，直系家族世帯であることに加え，世代的連続性，家業・家産の維持，単独相続などである．父系ラインの継承は，日本では儒教圏ほど重要な要素ではない．ベトナムの直系家族は長男同居が原則だが，娘も含む均分相続である．日本とベトナムの家族パターンは，東南アジア的双系制と儒教的父系制の奇妙な混合物であるとされる．

タイの直系家族はより東南アジア的特徴が強く，妻方同居制で，夫は妻の親に仕える．通常は子の出生時，または妻の姉妹の結婚時に夫婦は妻の実家を出るが，末娘夫婦は親が死ぬまで実家にとどまる．タイでは均分相続が普通で，祖父母以上の祖先は意識されず，世代的連続性は持たない．

国内の地域差を考慮すると，図式はずっと複雑になる．日本については，東北日本（直系家族が最頻），中央日本（本州西部と九州東部，単純家族が最頻）と西南日本（九州西部，合同家族が多い）の三類型が提唱されている．東北地方の女子の早婚は中国に匹敵するが，西南日本の男子の晩婚はヨーロッパに匹敵する．沖縄では婿養子は好まれず，日本本土より父系制が強かったと考えられる．北ベトナムの家族は東アジア的で，南ベトナムは東南アジア的だと言われる．済州島の家族は朝鮮本土と全く異なり，女権的でさえある．

本書の第Ⅰ部はヨーロッパの直系家族の分析にあてられており，Wall による Le Play の直系家族／不安定家族の概念の批判的検討に続き，ドイツ語圏，スカンジナビア，フランス，東ヨーロッパの直系家族に関する歴史人口学的研究が並ぶ．しかしここでは，第Ⅱ部のアジアの直系家族に関する章を中心に見て行くことにする．

米村千代と Mary Louise Nagata の第 9 章は，日本におけるイエの研究史をレビューしている．有賀＝喜多野論争は主に認知的・観念的領域におけるイエ概念をめぐるもので，特に有賀は戸田のような人口学的分析を批判した．もちろん関心によっては世帯より同族やリネージの方が重要な分析単位であり得るが，定量的分析を欠く議論は空論に陥りやすい．今から見ると，江戸時代の世帯規模・構造に関する歴史人口学的研究に裏づけられていないこの時期の家族研究は，空論めいた印象を免れない．

落合恵美子の第10章は英語文献におけるイエの研究史をレビューした上で，東北日本（岩代国下守屋村・仁井田村）と中央日本（美濃国西条村）の世帯システムを比較している．それによると両者とも直系家族システムではあるが，初婚年齢や奉公の慣行や継承のタイミング等で両者はひどく異なり，同一の世帯システムとはみなせないと結論づけられる．隠居慣行は見られないものの，中央日本の世帯システムが晩婚，婚前奉公，単純家族の多さ等でヨーロッパに似ていた点は興味深い．

黒須里美の第11章は，早婚だった岩代国下守屋村・仁井田村の結婚パターンの分析である．妻の平均初婚年齢は18世紀前半の出生コーホートで12.9歳で，19世紀になっても17歳を越えることはなかった．離婚と再婚はありふれており，特に離婚女子の再婚割合は中央日本やドイツに比べ異常なほどの高さだった．再婚機会の多さが離婚率を高めていたし，また経済的リスクが高い東北日本では結婚が保険の役割をしたとされる．

中里英樹の第12章は下守屋村の人別改帳を用い，高齢者の子との同居パターンを分析している．イベントヒストリー分析の結果，石高が多いと子の離家確率が低く，戻り確率が高いため同居割合が高くなることが確認される．しかし子を区別しないイベントの分析は解釈が難しく，子から見た親との同居解消・再同居の分析によって補完される必要があると感じた．

Nagata の第13章は下守谷村の農民のライフコースにおける名前の変遷を扱っている．Hahm（咸翰姫）の第14章は，日本による統治が認知的モデルとしての朝鮮家族に与えた影響を扱っており，人口学的分析ではない．Paik（白承鍾）の第15章は，済州島大静県徳修里の戸籍の下書き（1804～1908年）に基づく歴史人口学的研究である．そこでは離婚・再婚・夫婦別居は日常茶飯事で，直系家族より核家族の方が多く，女世帯主世帯も珍しくないという，儒教的通念とは異なる家族制度が描き出される．しかし Paik 自身も述べているように，徳修里の家族パターンがどの程度一般的なのか特定し難いのが歴史人口学の難しさだろう．

日本・朝鮮以外のアジアに関する章は20世紀後半以後のデータを用いており，歴史人口学的研究とは言い難い．Khuat の第16章は，1989年センサスと1993年生活水準調査を用いたベトナム家族の分析である．それによると拡大家族は北部より南部，農村より都市で多い．伝統的家族パターンについては既存文献を引用し，長男はわずかに優待されるだけで均分相続に近かったこと，父系親族から養子を迎えることがあったがほとんど相続にあずからなかったこと，女性の地位は比較的高く娘も相続したことなどが言及される．しかしどの程度確実な歴史的資料があるのかは，よくわからなかった．Limanonda の第17章も同様で，タイの家族パターンについて直接分析されるのは1960年以降のデータに限られ，均分相続や女子の地位の高さがどの時代まで遡れるのかわからない．Cartier の第18章も，1982～2000年の中国のセンサスデータの分析である．

第Ⅲ部は比較分析で，Fauve-Chamoux が第19章でヨーロッパ内の比較，第20章で南フランスと東北日本の比較を行っている．後者によると，東北日本は南仏に比べ拡大家族・多核家族が多く，きわめて早婚で，女世帯主の割合は低く，生前継承が多かった．それでも世代的連続性の観念を持つ直系家族制である点で，日仏の共通性は明らかだとされる．中央日本であれば，ヨーロッパとの類似性はさらに高いだろう．

本書では日本以外に近代化以前のアジアの資料を扱っているのは Paik による済州島の分析だけで，儒教圏や東南アジアに比べ日本がどの程度北西欧の家族パターンに類似していたのかは確証が得られていない．この点では，人別改帳という圧倒的に良質な史料を持つ日本と，それ以外のアジア諸国の差が出たと言える．Paik が分析した済州島の家族は，朝鮮本土とは異質だった可能性が高い．朝鮮の伝統家族については四方博らによる大邱戸籍大帳の分析があるが，それによると17～19世紀に核家族が50～70％を占めていたとされ，中央日本よりさらにヨーロッパに近かったことになる．族譜を信じる限り，両班層では同姓不婚・異姓不養の原則が守られていたことになり，この点は日欧と非常に異なる．しかし常民や奴婢のライフコースや世帯形成行動が両班とどう異なっていたのか，人口学的分析は見たことがない．朝鮮に限らず，中国や東南アジアでの歴史人口学的研究の進展を期待したい．（鈴木　透）